



卓 話



「世界社会奉仕活動報告」

ラオス人民民主共和国への教育支援

鯉江 園子国際奉仕委員長

ロータリークラブにおける国際奉仕とは、「ロータリアンが国際理解、親善、平和を推進するために実施できるすべてのこと」とあります。国家・思想・宗教などの要素が複雑に入りまじったこの世界を、ロータリアンの fellowship に基づいた相互理解でひとつのものにして、恒久的な世界平和を目指そうとするものです。その国際理解の推進や親善を築く奉仕の中には「青少年交換」や「世界社会奉仕」などのプロジェクトがあります。中でも世界社会奉仕は「WCS (World Community Service)」と呼ばれ、「人道的なプロジェクトを地球レベルで行う・地元社会の枠を超えたプロジェクトに取り組む・他国のロータリアンとの絆を深める」などが可能になります。東京四谷ロータリークラブのWCS活動は、2002年から現在までラオス人民民主共和国に対して継続して行っています。



ラオスは、東南アジアのインドシナ北東部に位置する社会主義共和国です。中国・ベトナム・カンボジア・タイ・ミャンマーの5つの国に囲まれた内陸国で、南北の距離は約1,000km、東西は最も幅のある所で500km、面積は日本の本州とほぼ同じ236,800平方kmです。国土全体が険しい山地と高原が連なり、その間をメコン川とその支流がカンボジアへ流れています。メコン川は全長1,500km、南では川幅が1,500mにもなります。一番高い山はピア山で標高2,820mです。2006年の人口は6,217,100人で、日本の20分の1(5%弱)、山岳・高原・平野に住む三つの民族は68部族にもなります。ベトナムとの国境付近では現在も村人が地雷の被害を受けています。5歳以下の子どもの死亡率が高い原因は、栄養不足で基礎体力の低下で下痢・マラリヤ・デング熱などにかかり、医者や病院、薬も不足しているからです。公衆衛生の概念は乏しく、学校にもトイレはありません。気候は熱帯性なので季節風の影響を受け、5~10月が雨季、11~4月が乾季です。人口の85%が農業生活者で、米・とうもろこし・ジャガイモ・タバコ・コーヒーを作り、メコン川の漁業、林業、鉄などの鉱産も経済を支えています。主な輸出品は、木材・コーヒー・すず・石こう石などで、ダムによる水力発電の電力はタイ外貨を獲得して

す。輸入は、石油製品、機械、食料などです。日本のODAがダムや橋・道路などの土木開発援助を行い、ラオスの発展を支援しています。1997年ASEANに加盟、2004年首都ヴィエンチャンにて会議が開催され、当時の小泉首相が出席しました。タイと同じく国民のほとんどが仏教徒(小乗仏教)で、僧侶は非常に尊敬されています。

ラオスの歴史は、1353年ランサン王国として統一されましたが、1828年内部分裂の危機に陥り隣国のタイ(当時シャム)が攻め入り勢力下に入りました。1899年にフランス領のインドシナ連邦に、その後第二次世界大戦で日本軍が占領した後1953年に完全独立してラオス王国となります。しかし内乱のため1975年12月2日に現在のラオス人民民主共和国が誕生しました。ラオス社会主義革命指導者の一人である故プーミー・ボンビット氏が健在の時、同じ革命家で懇意にしていたベトナムの故ホー・チミン氏に「インドシナの開放は日本のおかげだ」といつも語っていたようです。ラオスは戦後、日本に対する賠償請求権をいち早く放棄しました。ヴィエンチャンの歴史博物館では、ラオスと日本の友好の歴史が展示してあります。

国連開発計画(UNDP)による人間開発指数(HDI)は、国の豊かさの順位です。測定は次の4つの情報からそれぞれの比重値に基づいて加算をして指数が求められます。

1. 成人識字率(15歳以上)：(100%で1、0%で0) 識字率は初等教育を終えた年齢、一般には15歳以上の人口に対して定義される。識字とは、母語における日常生活の読み書きができること。全世界の平均識字率は、約75%
2. 総就学率：(100%で1、0%で0)
3. 一人当たりのGDB：(一人当たり40,000ドル以上で1,100ドル以下で0)
4. 平均寿命：(平均寿命が85歳以上で1,25歳以下で0)

2007年度の発表によると、世界177カ国中、日本は9位、アメリカ12位、韓国26位です。ラオスは130位ですが、近隣国では、タイ78位、中国81位、ベトナム105位、ミャンマー132位、カンボジア131位となっています。

【ラオスの順位と指数】

- ①開発途上国の人間貧困指数順位：63位(2006年)
- ②貧困ライン以下の人口割合：27%(1990-2004年)
- ③平均寿命満40歳未満の人口割合：28%(2000-2005年)
- ④15歳以上人口の非識字率：31.3%(2004年)
- ⑤安全な水が1km以内で得られない人口割合：49%(2004年)
- ⑥5歳未満の低体重児の割合：40%(1996-2004年)
- ⑦満1歳未満の死亡率：1000人あたり65人(2004年)
- ⑧満5歳未満の死亡率：1000人あたり83人(2004年)

ラオスは、北の山岳地域・中央・南の高地・平地と、その地域によって民族や職業、も貧困度も違います。ラオス国家統計センターが世界銀行等と協力して実施した家計調査によると、首都ヴィエンチャンの消費率は、他の地域に比べ特出して高くなっています。ヴィエンチャンを1とすると、北部は0.43、中部は0.54、南部は0.55で、この数値からも首都が豊かで北部山岳地方は貧困であることがわかります。北部では自給自足の焼畑が行われていて、医療や教育を受けられない子どもが大勢います。首都ヴィエンチャン以外は、とても貧しいという印象でした。

ラオス政府は、自国の貧困について2001年6月「国家貧困撲滅計画の形成にかかる」文書で次のように発表しています。「貧困とは①食料の不足（1人1日2100カロリー以下）②衣服の不足 ③定住する家の不足 ④病気の治療費の不足 ⑤教育費用の不足の5つが挙げられる。該当する村の全世帯の51%以上が貧困世帯で、郡において40%以上の村に①学校がない、②道路がない、③清潔な水がない、④保健所か薬局がない。」このことから厳しい現実がわかります。

社会主義体制下にあるラオスでも1986年に経済開放政策を打ち出し、経済体制の実践ができる知識や能力を有する人材の育成が緊急の課題となりました。ラオス政府は1996年10月アジア開発銀行による大学改革計画に基いて、11の高等教育機関を統合し、ラオス国立大学を設立。経済経営学部に対してカリキュラム開発、ラオス人の教員育成を2001年9月まで行いプロジェクトを終了しました。そしてラオス政府は日本政府に、終了後の技術協力を要請してきました。1998年1月、当時33年ぶりとなった小渕首相のラオス訪問を機会に無償資金協力による人材育成と、日本・ラオス両国の人的交流・相互理解の拠点となる日本センターを提唱しました。日本は近年ラオス人民民主共和国に対する二国間援助の様々な領域でのトップドナーで、特に人的資源開発の領域は、経済協力政策協議においてベーシック・ヒューマン・ニーズ・農林業及びインフラストラクチャー整備とならんで、協力の重点分野として掲げられています。JICAでは高等教育としてラオス国立大学工学部への協力（専門家・海外シニアボランティア・青年海外協力隊）同大学の拡充とラオス日本人材開発センターの新設・教員養成学校・初等中等教育の分野において、カリキュラムと教科書の開発や教員養成の分野協力をしています。しかし、それらの教育を受けることのできる人々はごく一部です。

さて、私たちのラオスへの支援活動についてですが、2002年、RI第2580地区のWCS委員会活動でシーブンファン村に小学校校舎を寄贈しました。当時の地区委員とともに、梶浦委員長はじめ東京四谷の会員5名が現地に赴き式典への参加と子どもたちへ教科書や文具、地球儀などを贈りました。2003年、翌年に予定している当クラブの20周年記念事業の国際奉仕部門で、ラオスに小学校を寄贈することが決定しました。当時ドナーの資金不足で建設中止になっていたラオスノンボン村小学校（5教室）を、予算約120万円（教科書・文具込み）で寄贈することが可能となりました。

小学校が完成した2004年11月22日の寄贈式典に会員他15名が現地に赴きました。首都ヴィエンチャンでASEAN会議が

開催されていたために首都に入れず、タイ南部のパクセから陸路メコン川を越えるルートを取りました。式典では、日本から持っていった新潟県の小学生の習字と絵画の作品も贈りました。校長先生に、「校舎以外は自助努力で学校を運営すること。具体的には学校をきれいに使う・就学率を上げる・勉学に励む」という事柄を約束させて、ノンボン村を後にしました。

2006年4月29日、1年半ぶりのラオスにタイを経由して向かいました。今回の目的は、私個人が寄贈したパクライの学生寮を視察することと、東京四谷RCで寄贈したノンボン村小学校、2580地区で寄贈したシーブンファン小学校のその後を訪ねることです。しかしラオス北部のパクライから南部のカムアング県セバンファイ郡やサワナケート県ウトゥムポン郡までラオス国内を数百キロ移動することは、険しい地形と治安の問題で難しいのです。そこで北のパクライ・サイニャブリに行き、一度バンコクに戻り、再びタイ南部からラオスに入るという経路を取り、ラオスへの出入国を2回に分けました。日本を出発した私は学校と寄宿舎の建設を依頼したBACとバンコクで合流し、国内線に乗継ぎウドンダニに向かいました。翌朝手配していた車でタイとラオスの国境に行き、ラオス側で待っていた郡の教育省委員の迎えの車に乗り替え、パクライからサイニャブリの小中学校を訪問しました。郡の教育省は、この地域の多くの小中学生を学校に行かせようとしていますが、遠くの村から通えませんが寄宿舎が必要になります。現在ある寄宿舎は壊れた海の家よりまだひどいものです。そこで学生寮を寄贈することになったわけです。私の寄贈した寮は小さなものですがほぼ出来上がっていました。泥と穴だらけの悪路を10時間以上走ることに慣れてきました。翌日はケントオの学校を調査しました。これも建物とは言えないほど朽ちていました。このあたりの山岳地域の人々は、焼き畑農業で自給自足をしていて、平地の民族より原始的な生活をしています。午後ラオスを出国し、タイ側国境で待っている車に乗り込みウドンダニ空港まで走り、国内線でバンコクに戻りました。5月3日、バンコク空港で梶浦さんが到着するのを待ち、国内線でウボンラチャタニに到着したのは深夜でした。4日の朝、車でムクダハンまで行き、タイ国境を越えラオスのサバナケットに向かいました。市場で文具を買いノンボン村を訪問し、生徒と先生、村人たちの歓迎を受けました。校庭に池が作られ、校舎はきれいでした。先生方が村をまわり「子どもを学校に通わせるように」と説得したらしく、生徒数は170名（男99女71）で5%増えていました。教室には寄贈時に持っていった日本の小学生の絵画と習字が壁に貼られていて、その隣にはラオスの子どもたちが真似た絵や、鉛筆で描かれた習字も貼ってありました。寄贈時の約束は3つとも守っていました。私は絵画の授業をしてきました。子どもたちは素直で明るく伸び伸びとした気質で人懐っこく、とても楽しそうに絵を描いていました。何度か訪れた懐かしいホテルに到着し、翌5日は2002年に地区WCS委員会で寄贈したサワナケート県シーブンファン村の小学校を訪問しました。校庭の敷地が以前の半分まで狭くなっていました。4年ぶりだったにもかかわらず、校長先生はじめ村人は憶えていてくれて歓迎の会をしてくれました。ここでも絵画の授業を行いました。ノンボ

ン村の子どもたちより「やんちゃ」で活動的でした。校舎の一部が地盤沈下によって欠損していたのが気になりました。途中まで作りかけたトイレがありましたが、資金がないので中断しているとのことでした。翌日はサバナケットからラオス国境まで走り、メコン川を越えムクダハン、ウドンダニまでただひたすら走りました。タイ国内線でバンコクに戻りホテルに入ったのが夕刻、8日の早朝に成田に到着しました。この視察でわかったことは、校舎を作り生徒が集まったものの、学校では教科書の不足と教師に教育スキルがないことから、適切な授業が行われていなかったことです。せめて学校に図書があれば本を使った教育ができるのではないかと思います。また、現在のラオスでは隣国タイ語を話す人が増え、母国語のラオス語を読み書き話せない子どもが多くなっていると、ラオス語の消滅が危惧されていました。

2007年8月25日、学校建設を行うNGOであるBACの25周年記念行事参列と教育省と現地NPOを視察するために、梶浦会員と私はヴィエンチャンを訪れました。そして、ラオス人の米山奨学生だったチャンタソン・インタヴォンさん代表の「特定非営利活動法人ラオスのこども」の事務所も訪問しました。この機関は図書の配布と先生への教育セミナーを行うNPOです。図書の寄贈と同時に、図書管理や教育の方法も指導します。図書箱を利用して識字教育を行っているヴィエンチャン近辺の小学校を廻りました。約150冊の本が入った木製の本箱は設置用で、布製のタペストリーのような本箱は移動図書として使われています。ラオス語に訳された紙が貼ってある日本の本も何冊もありました。また、ラオスに発足したという国際ロータリークラブの現状を調べる目的もありましたが、情報はありませんでした。引き続き現地の人に調査を依頼してきました。帰国後、ラオスロータリークラブの連絡先が政府の中にあったとの情報が入り、残念ながらマッチンググラントはあきらめました。その後、ノンボン村小学校など3校への図書箱寄贈と、先生を対象にした図書を使った教育法の指導セミナーの見積もりが来たので、クラブ内で協議して支援を決めました。図書箱セットの中身は、178タイトル/440冊の他、図書の貸出等に必要な文房具（ノート、A4用紙、テープ、ボールペン、ハサミ、貸出カード、貸出カード入れ等）。セミナー・移動費込みで約US. 800ドルです。

【ノンボン村小学校調査（2008年2月21日現在：生徒数4%、7名増えた）】

●場所：カムワン県セパンファイ郡ノンボン村 ●校長名：コーンマシハラード氏（変更なし）●対象村：ノンボ

ン村 ●民族：プータイ族（低地ラオ族）●村の世帯数と人口：160世帯187家族人口976人（うち女性479人）●生徒数：1年生 53人（23人）2年生 37人（15人）3年生34人（16人）4年生 24人（10人）5年生 29人（12人）合計177人（76人）*括弧内は女子の数。●1年生に入学する前のプリスカールも併設。プリスカールの子どもたちが新校舎の教室を利用し、4年生の子どもたちが木の校舎を利用。1年生のみ2クラス、他は1クラスずつ。●中学進学者数：卒業生26人中、24人が進学。1人は家の事情で進学せず1人は引越。●教員数：9人（クラス担任7名、校長、もう1人）もう1人の先生は病気休養中だったが、治ったので定年まで学校で働くことになった。クラス担任をしていない。●教科書の普及状況：教科書は、学年初めに生徒に貸出し学年末に回収する。以前は教育地区の中心校だったため教科書が充実していたが、現在はページが欠けてしまっているものが多い。●教科書以外の図書の有無：教育地区の他の学校から少し受け取ったことがある。●その他：トイレは壊れたままで、まだ補修はされていない。村人に教室追加のための製材を支援して欲しいと考えている。（校長談）

2008年2月、図書箱（本440冊）の寄贈と、3校の先生方と教育省の先生を一同に集めた識字教育法のセミナーが、チャムパサック県パクセ郡パクセ教員養成校内会議室で開催されました。セミナーは3日間で、国立図書館職員による講義（図書の貸出、利用者数の統計の取り方等）や、読み聞かせ・絵を描く・書取り・ブックトーク・演劇・語り・内容質問・感想文・要約・書く・等々の教え方の講義です。その後も、本の教材を使った授業は順調に行われているとの報告を受けました。

物で溢れる日本が「豊かな国」だとすれば、ラオスは「貧しい国」です。しかし、私が知る限り、平均寿命50歳のラオスの人達は、日本人より毎日を明るく淡々と生きているように見えます。WGS活動を通して、物を与えるだけが支援ではない、共に生命の鼓動に調和していくような関係性の中にこそ「奉仕活動」があるのだと気付きました。「支援する側・される側」という一方のものではなく、相互に与え・貰うものがあって、どちらも充足している関係が理想です。5つの国に囲まれたこれからのラオスは、とりわけ中国の影響が大きくなっていくと考えられます。何かを手にする事で失うものがあるということ、人間にとって「豊さ」とは何なのか、そんな流動的な世界とどのように関わっていくかが、今後の私のWGS活動におけるテーマです。国際奉仕活動の実践から、多くのものを学ぶことができた幸せを実感しています。